

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2018 094



国吉康雄 《ここは私の遊び場》 1947(昭和22)年 油彩、キャンバス 福武コレクション
「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展より

「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展を振り返って

—コインの裏表のような存在としての国吉と石垣

【会期】2017(平成29)年10月7日(土) — 12月24日(日) 【主催】和歌山県立近代美術館
【共催】公益財団法人 福武財団 【協力】岡山県立美術館、太地町立石垣記念館
【企画協力】岡山大学大学院教育学研究科〈国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座〉

国吉康雄(1889-1953)と石垣栄太郎(1893-1958)。この展覧会では、戦前のアメリカへ移民として渡り、太平洋戦争という困難な時期を挟みながら、画家として活躍した二人の足跡を辿った。

国吉は岡山県岡山市から、石垣は和歌山県東牟婁郡太地町から、ともに二十歳にもならない若さで移民としてアメリカへ渡った。様々な職に就きながら、美術学校に通い、画家を目指した二人は、ともに1920年代から活発に作品を発表し始め、ほぼ同時代をアメリカで過ごしている。

アメリカ画壇での評価を受け、戦後はホイットニー美術館で現存画家として最初の回顧展が開催されるなど、アメリカを代表する画家として認められた国吉。生活や風俗を描き、また社会主義に傾倒するなかで同時代の様々な問題を告発する絵画を描いた石垣。二人は、絵の修業を始めたアート・スチューデント・リーグ時代に出会って以来、友人関係にあった。そして1930年代にはニューヨークのアパートで隣合って暮らし、屋上の塀をまたいで頻りに行き来していたと、石垣の妻、綾子(1903-1996)は回想している。太平洋戦争が始まると、彼らは「敵性外国人」という立場に置かれるが、アメリカの自由と民主主義の理想を信じ、日本の軍国主義を批判した。

メッセージを巧みに画面に忍ばせ、象徴的な事物によって語らせる国吉、より直接的に物事を描き出す石垣と、それぞれに作風は異なるが、二人の作品には、日本人移民排斥や大恐慌、戦争などアメ

リカ社会が激しく揺れ動いた時代に、二つの国の間で生きた画家の複雑な思いが込められている。この展覧会では、その時代と社会に対して二人がどのように向き合い、作品を残したのかを、あらためて見つめる機会とした。

戦前の渡米画家というと、まず国吉康雄、そして石垣栄太郎、清水登之、野田英夫らの名前があがる。それぞれの個展、またこの4人も含めた渡米画家の作品を集めた展覧会は、過去にも開催されてきた。しかし国吉と石垣、二人だけの展覧会は意外にも今回が初めてとなる。そもそもの企画の始まりは、福武コレクションを福武財団と共同で研究する岡山大学から、国吉作品を、国吉と縁のある美術館で紹介していきたいと声をかけていただいたことによる。初期から晩年に至る良質の国吉作品を誇る福武コレクションを、当館で紹介できることは願ってもない機会だった。

当初から国吉と石垣との二人展として展覧会を構成しようとしていたわけではない。その案もあったが、最初は消極的だった。ヴェネツィア・ピエンナーレのアメリカ代表となるような画家である国吉と、石垣の作品を対等に展示することが可能かという不安が、その大きな理由のひとつだった。予算の都合で、他館に石垣の代表作の出品依頼をすることが困難だという状況もあった。

しかし展覧会の構成を考えるうちに、1910年代のアート・スチューデント・リーグ時代からアメリカ画壇でのデビューの後、1930年代半ばにアメリカ美術家会議で共に活動する頃までは、国吉と石垣は画風の違いこそあれ、いや違いがあるからこそ、その時代を浮かび上がらせることも可能に思えた。けれどもそれ以降、日米の戦争から戦後に至る時代の石垣作品は、国吉のタフさに比べて、あまりにもその弱さを露呈してしまっていた。悩んだが、岡山大学准教授の才士真司氏とも協議し、最終的には、友人であり同じ時代を生きた二人の画家のありのままの姿を見せることが肝要ではないかという結論に至った。

そして、国吉と石垣をつなぐ、その時

代の語り部として浮かび上がったのが、石垣栄太郎のパートナーである石垣綾子の存在だった。綾子は戦後に多数の著作を残し、折に触れて国吉とその交流について回想している。今回の展示では、『美しき出会い—回想の18人—』(ドメス出版、1983年)に収録された「国吉康雄—アメリカの大地に花ひらく」からテキストを引き、各所で綾子の言葉によって二人の交流や生きた時代について回想することにした。

展示は、まず入口正面の壁に二人の代表作、国吉康雄《ミスター・エース》(1952年)、石垣栄太郎《ボナス・マーチ》(1932年)の2点を並べ、裏面に二人の年譜を配置した。そして対面する壁面の両側から国吉と石垣のそれぞれの歩みを追う構成とした。振り返ると同時期に描かれたお互いの作品がある。二人が共に生きた時代を、作品とともに辿った。実際に展示してみると、当初感じていた不安は消え、コインの裏表のように時代を描いてきた国吉と石垣の姿があらわれてきた。

特に心配していた戦後のコーナーでも、黒い日の丸が荒野に垂れ下がった《ここは私の遊び場》(1947年・表紙)のように暗喩を多分に含んだ国吉作品は、全く混乱して自身の不安定な感情がそのまま投影された同時代の石垣の作品と比べることで、謎のなかにある怒りや哀しみが浮き彫りになり、また数多く描かれた道化師は、仮面によってそれらの感情を押し隠した国吉の姿にも見えてくるのだった。これらは予期せぬ気づきだったが、国吉も石垣も、このように自分たちの作品が展示されるとは思ってもみなかったのではないだろうか。

国吉と石垣の新たな出会いが生まれた本展は、福武財団との共催、岡山大学大学院教育学研究科〈国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座〉(2018年4月から〈国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座〉)との連携、また貴重な作品を出品くださった岡山県立美術館、太地町立石垣記念館、田辺市立美術館をはじめとした関係各位のご協力によって実現することができました。最後に深く感謝申し上げます。(奥村一郎)



国吉康雄
《ミスター・エース》
1952(昭和27)年
油彩、キャンバス
福武コレクション



石垣栄太郎
《地獄へ(情慾)》
1949(昭和24)年
油彩、キャンバス
当館蔵

本展覧会の共同企画者である才士真司氏(岡山大学准教授)には、才士氏が「vs. 展」と呼ぶ2人展について、展覧会開催の経緯も含めて寄稿いただいた。国吉との「vs. 展」は今後も続き、4月からは栃木県立美術館にて展覧会「国吉康雄と清水登之 ふたつの道」(2018年4月28日—6月17日)が開催される。

また、石垣栄太郎、綾子の活動には美術史だけでは捉えきれない側面がある。松坂裕晃氏(ミシガン大学博士課程)には、思想史・社会運動史からの石垣夫妻研究のアプローチについて寄稿いただいた。松坂氏はシンポジウム「マイノリティ史研究と環太平洋世界」(日本アメリカ史学会第14回年次大会、2017年9月)において、「つながる／つながらぬ『マイノリティ』運動:トランスパシフィックな反帝国主義と人種・民族関係」という、石垣栄太郎・綾子夫妻の活動を主な題材とした報告を終えたばかりである。(奥村一郎)

国吉康雄 × 石垣栄太郎 ~ vs. 展の効能

バーサス

才士 真司

ある芸術家の生涯を、その作風の変遷で辿ること。これはひとりの芸術家を深掘りする企画展の醍醐味ではないだろうか。目当てとなる作品のために足を運んだ来場者も、芸術家がどうやって、その作品や作風に行き着くかを自身の目でたどり、「最初からこうではなかった」と知ったり、才能や努力が結実していく様を目撃するなかで、芸術への興味をさらに掻き立てられるのではないだろうか。そして、こう思う(思っしてほしい)。「美術館っていいな」と。

しかし私もそういう仕事に参加できればと思いつつながら、国吉康雄という少し「ややこしい人」に関する展覧会を企画している者としては、あるもやもやを感じているのも事実だ。

国吉康雄(1889-1953)という人は、所謂、アメリカン・ドリームの実現者で、アメリカをアメリカたらしめる「多様性」のシンボルのような人だ。岡山で生まれた国吉が16歳でアメリカを目指したのは、日露戦争が終結した翌年、1906(明治39)年で、外貨獲得を国が奨励するなかでの労働移民としての渡米であり、当時の西海岸はアジア系移民を排斥する黄禍論の真っ只中だった。過酷な労働環境に職を転々としながらも、英語を学ぼうと通った夜間

高校で、その画才を見出され、ニューヨークへ移住する。これが吉と出て、「才能ある者にハシゴをかける」というアメリカの良き伝統と、彼に好意的な人物との様々な出会いがあり、40歳の頃には、開館間もないMoMA(ニューヨーク近代美術館)の企画した展覧会でアメリカを代表する画家として選出された。大都会ニューヨークで、1920年代の華やかな時代と二つの世界大戦、世界恐慌を体験し、戦後に起こるアメリカ民主主義の転換点などを目の当たりにしながら、絶えず作風を変化させ、1948(昭和23)年にはヴェネチアビエンナーレのアメリカ代表にまでなった。その画業は輝かしい評価に彩られているが、この激動の時代に人権・社会活動家、教育者としても名を馳せた国吉は人間としてもかなり面白い。「アメリカを代表する」とされながら、市民権を持たないアジア系移民のマイノリティであり、太平洋戦争の勃発により敵国人ともなる。国吉を巡るドラマは、何もかもがアメリカ的なものだ。2015(平成27)年にスミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアムで開催された回顧展「The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi」の主題はまさにここにあり、40万人を動員したというのも、今のアメリカの現状を物語る数字だろう。

私が籍を置く岡山大学大学院教育学研究科に設置されている〈国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座〉では、油彩・カゼイン画、59点を中心に、版画や写真、遺品も含めると約700点もの国吉康雄関連のコレクション(福武コレクション)の研究と顕彰活動を、コレクションを管理する公益財団法人福武財団と共同で行っている。福武財団といえば、直島や豊島、犬島といった瀬戸内の島々にあるアート施設や瀬戸内国際芸術祭の運営が有名だが、同財団が展開する「ベネッセアートサイト直島」と呼ばれる瀬戸内でのアート運動の原点ともいえるべきコレクションが国吉康雄だ。瀬戸内のアート運動の原点



国吉康雄《少女よお前の命のために走れ》1946(昭和21)年
カゼイン、石膏パネル 福武コレクション

のコレクションとして、そしてアメリカの多様性を象徴する芸術家・教育者・社会活動家として、国吉康雄を取材、研究し、顕彰活動を行なっているのが本講座のプロジェクトだ。本講座では、美術史的な視点だけではなく、国吉にある様々な面、特に、その多様性の象徴としての部分にスポットを当てる企画も行なっている。

2016(平成28)年に、横浜のそごう美術館と共同で行った、「国吉康雄展～少女よ、お前の命のために走れ」展では、サブタイトルの元となった、素足の少女が巨大なカマキリに追われているという不思議な国吉作品をテーマに、来場者に、「国吉はなぜ、この少女に、お前の命のために走れと命じたのか」という問いをぶつけ、国吉の生きた時代と作風の変化を体感するという展示手法をとった。展覧会に物語性を持ち込んだ目新しさと、最初期から晩年までの代表作を、国吉の生きた時代の出来事と人生を感じるように配置した展示は、大多数の来場者には好評を頂いたが、一部、拒否反応にも近いお叱りを受けました。こうした賛否をいただいた展示を経て、少なくとも国吉に関しては、美術史的な視点だけで語ることの限界と、視点を変えることでの可能性を感じた。その一つの可能性が国吉康雄と縁のある作家との、vs. 展だった。

今回の vs. 展が成立した背景には、幾つかの要素がある。まず、物理的な問題



国吉康雄《カーテンを引く子供》1922(大正11)年
油彩、キャンバス 岡山県立美術館蔵

で、双方のコレクションの規模だ。福武コレクションが所蔵する油彩画とカゼイン画は59点。少なくはないが、この点数では県立規模の美術館では単独での企画展は難しい。一方、和歌山県立近代美術館にも同程度の規模の石垣栄太郎コレクションがあった。幸い、この二つのコレクションを足せば、企画展を実施するに十分な規模となった。次に、コレクションの「視点を変える」ことでの展示企画に対して、和歌山県立近代美術館と共通認識が持てるかということだった。石垣栄太郎と国吉康雄の関連性は非常に高いので、もちろんそれだけで成立するのだが、私は国吉に関わる取材活動を続けていくなかで、「あることが気になる」と、石垣研究を行っている奥村一郎学芸員に伝えた。

規模の違いはあれど、どの地域にも美術館や博物館がある。そして、それらの館では、その館が属する地域にとって、ゆかりある作家の作品がコレクションの中心となっているケースが多く見受けられる。和歌山県立近代美術館の石垣栄太郎コレクションもそうだ。美術館にとって重要なコレクションで、冒頭に書いたような回顧的な内容の企画展がなされたとしたなら、それは地域にとっても、美術館にとっても素晴らしい成果だと思うが、そういった企画はすでにやり尽くされていて、展示の切り口を変えてみたところで、ほとんどの市民が思うのは、「またか」ではないだろうか。これは岡山でもそうで、国吉作品で何らかの展示をすると、「また国吉か」と、必ず言われる。けれど、そこに比較する対象を持ち込むことで、視点が変わればどうだろうと話した。新たな価値が生まれまいだろうか。奥村学芸員は話の要点を即座に理解し、企画が進むことになった。成立まで

には紆余曲折があったが、共催に福武財団が立ち、資金面で問題がクリアされ、企画は、「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展として成立することとなった。そして、この vs. 展の効能が想像以上だったことに驚くことになる。

展示は左右の壁に石垣と国吉を見ながら進み、時には石垣だけ、国吉だけと変化し、次の区画ではまた混じり合い、来場者は振り返れば全く作風の違う、親しい友人同士だった画家たちの作品を体験した。それは同じ学校で絵を学び、隣り合うアパートで暮らした二人が感じた時代と空気感だったのではないだろうか。二人は同じ街の空気を吸い、同じ景色を見てきた。同じ団体に所属し、共通の友人も多くいた。栄太郎の妻、石垣綾子は国吉のことに度々日記で触れている。なのに、二人の作品はまるで違う。二人とも時代とともに画風を変化させているが、それは、それぞれにだ。当たり前のことだが、二人の個性はまるで違う作品を今に残している。この二人の作品を共に展示することで、それぞれだけで展示した場合よりも深い気づきと思索の場が展示会場に生まれまいだろうか。これが企画展の正念場だったが、それは二人の作品のメッセージ性の豊かさにより、成されたのではと思える。

二人の描く作品は、思想やメッセージ性を主張する点で共通する。そこには、二人が共に学んだアート・スチューデント・リーグでの教えがある。石垣の先生であるジョン・スローンも、国吉を指導したケネス・ヘイズ・ミラーも市井の人々をよく描いたし、当時のリーグには、第一次世界大戦が生んだ難民を描くという課題があった。こういった社会への視点が二人



国吉康雄《ロバのいる風景》1928（昭和3）年
油彩、キャンバス 岡山県立美術館蔵

の作風に生涯影響し、石垣の場合、当時盛んだった社会主義運動との関わりの中で育まれた人脈と人権意識が、国吉の場合では、組織運営を行う中で身につけたアーティストの権利獲得運動のリーダーという側面が作用した。だが、その思想性・メッセージ性を、絵画を用いてどう主張したかに関しては決定的な違いがある。直接的か、そうでないかだ。

石垣のメッセージは画題にストレートに表現されていて、当時の記録写真やドキュメンタリーフィルムが残したイメージが、より劇的に描かれている。そこには権利の抑圧に抵抗し、激しく生を欲動する肉体が画面いっぱい描かれ、見るものを圧倒する。一方の国吉は、大恐慌以後、静物画や女性像に社会への意識が読み取れ、戦争の時代になると社会性はより強くなるように見えるが、その本当に意図するところは作品の説明を行わなかった国吉故にはっきりしない。国吉の、具体的なメッセージを伏せた画風が、二人の絵を並べて見ることで、より立体的に浮かび上がる。それは、二人が生きたアメリカそのものと言える。

例を出すと、1930年代だ。不況、そしてヨーロッパやアジアでの戦争は、二人に様々な問題を突きつけたことがわかる。国吉はすべての人種を混ぜ合わせたような物憂げな女性に、社会情勢を伝える新聞を読ませるなどのモチーフを用いて、暗に社会へのメッセージを発信し始め、石垣はより具体的で、市民の権利と平和を願う崇高なものへと作品を高めていく。だが、この二人の違いが、それぞれの人生の明暗を分けた。社会主義運動



会場風景（長岡浩司 / 撮影）





石垣栄太郎《ボーナス・マーチ》1932（昭和7）年
油彩、キャンバス 当館蔵



石垣栄太郎《素描[リンチ]》1933（昭和8）年
鉛筆、紙 太地町立石垣記念館蔵



国吉康雄《バンダナをつけた女》1936（昭和11）年
油彩、キャンバス 福武コレクション

とアメリカ民主主義の理想に燃えていた石垣の作品には、社会の苦悩というより、石垣自身の苦悩が見て取れる。石垣はその直接的すぎる行動と作品から、戦後は赤狩りの嵐の中、アメリカを追放されるが、後年には、完成された作品にわざわざ手を入れ、覆い隠すように混沌とした色彩を重ねている。戦後の国吉は全米美術家組合会長という美術界での立場か

ら、政治的なメッセージを直接的に作品に込めることはしなかったが、物憂げな表情の女たちは消え、表情を隠す仮面を多く描くようになりながらも、生涯をかけて突き詰めてきた色彩へのこだわりを見事に昇華させた作品を残す。

展示会場で若者が、「二人が作品で語り合っているようだ」と言っていた。確かに、そこにあったのは、時代と向き合い、

考え抜き、生きることを表現にした画家たちの軌跡だった。そして何より、これを来場者とも語り合う機会を与えてくれた和歌山での展示は、この先の本講座の活動へ示唆に富む、新しい視点を与えてくれた。このことに心から感謝したい。（さいと しんじ：国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科国吉康雄研究講座准教授）

社会を変えようとした二人—石垣栄太郎と石垣綾子 松坂 裕晃



図1 石垣栄太郎と石垣綾子 結婚した頃 1929(昭和4)年
写真(L. S. SUZUKI 撮影) 太地町立石垣記念館蔵

石垣栄太郎と石垣綾子(図1)は、歴史研究の対象として、きわめて独特な魅力と重要性をもっている。

従来の日本や英語圏の学界においては、主に美術史の分野で、栄太郎の画業に関心が集まってきた。都市の日常的な風景や、人種的マイノリティと労働者の力強い姿などを描いた彼の作品の分析が進められている。だがわたしは、その重要な成果に多くを学びつつも、近代史研究という観点から、グローバルな社会運動史や思想史の主体としての栄太郎に注目している。なぜなら、栄太郎は画家でもあり、日本からの移民労働者でもあり、社会主義運動家でもあったというめずらしい存在だからである。彼は、「米国への移住」、「労働」、「社会主義」それぞれの経

験を交錯させながら、ダイナミックな絵を描いた。別の角度からいえば、移住してきたマイノリティの画家だからこそ生むことのできた、独特な社会主義の考え方を提示した。この点で栄太郎は、移民/移住史や社会運動史・思想史の研究対象として異彩を放つ。また、彼の移住者・運動家としての思想や行動を歴史に照らして再検討することで、彼の作品に対する新しい解釈の可能性もひらかれるだろう。

ところで、栄太郎の作品を研究する際に重視されてきたのが、その妻・石垣綾子が残した著作や史料である。しかし、綾子本人の足跡に注目する研究は、学問領域を問わずあまり多くはない。綾子自身の活動や思想は、どのように評価できるのだろうか。

実は、綾子は栄太郎と同じくらいに、あるいはそれ以上に幅広い経験と強烈な個性をもつ稀有な存在であった。彼女は、渡米前の1920年代中盤までに、東京で拡大しつつあったフェミニズム運動の界限に出入りしていた。そして、自由な言論や生活、とりわけ女性の自立的な生き方を抑圧する日本社会に問題意識を持つようになる。綾子の場合、この東京での経験を保持しつつ、1930年代のニューヨークにて、日本の中国侵略に反対する平和運動家として花開いた点がユニークである。栄太郎の場合には、十代半ばまでの時期を過ごした故郷・和歌山で政治意識を高めたというよりは、むしろ渡米後に社会主義と触れたことで、政治思想を発展させたと考えられる。しかし綾子は、東京とニューヨークというふたつの場所で社会変革の思想を積み重ね、活動家や言論人の人脈をひろげながら、弁論や著述の腕を磨いたのであった。

石垣綾子は、このような経験を生かして米国各地で講演活動を行い、東アジアからの越境という個人的体験を紹介すると同時に反戦平和や国際連帯を訴えた。特に、日本女性としてのアイデンティティを前面に打ち出しながら、日本のフェミニズムに反対するという戦略によって、ひろく注目を集めた。彼女の活動のひとつの到達点が、1940（昭和15）年にニューヨークで出版した半自伝的な著書 *Restless Wave*（邦題：『憩いなき波』）（図2）である。同書はニューヨーク・タイムズなどの大手新聞に書評が掲載され、反響を呼んだ。米国でのアジア系女性による自叙伝的作品としては、最も早いもののひとつとされている。

このように栄太郎と綾子は、大資本と移民労働者の街・マンハッタンを拠点として、それぞれ個性的な活動に没頭した。また、このふたりの活躍の多くは、いわば両者のケミストリーの結果であったという点も、実に面白い。例えば、二人は1927（昭和2）年ごろに交際を始めるが、この交際を通じて、栄太郎が先に身を置いていたグリニッジ・ヴィレッジの芸術家・運動家のコミュニティに、綾子も足を踏み入れる。そして綾子は、これを入り口と

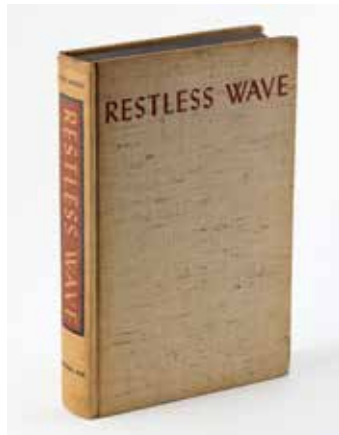


図2 Haru Matsui, *Restless Wave*（邦題『憩いなき波』）1940（昭和15）年 太地町立石垣記念館蔵
※ Haru Matsui（マツイ・ハル）は、綾子のペンネーム

して、ニューヨークの言論人や社会運動家のネットワークをひろげていった。また彼女は、年齢が自分より十歳上で、社会運動のキャリアも長かった栄太郎から思想的に学ぶことが多かったとのちに回想している。つまり栄太郎は、綾子が米国で言論人・運動家として成功するきっかけとして欠かせない存在であった。

他方で、栄太郎の画家としての飛躍にも、綾子の存在は不可欠であった。大恐慌下で、栄太郎の作品がなかなか売れず、生活が苦しくなった時期に、綾子のウェイトレスや女工としての収入は二人の暮らしを支えた。また、いままであまり指摘されてこなかったが、綾子の1930年代の旺盛な言論・政治活動は、栄太郎の仕事に重要な影響を与えたのではないかと

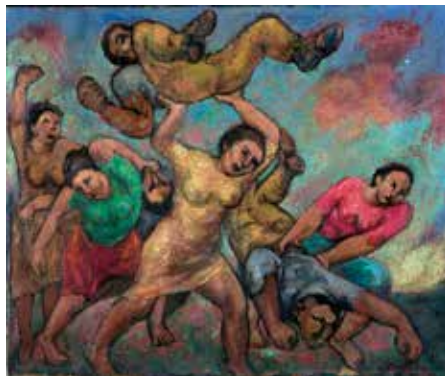


図3 石垣栄太郎《抵抗》1937（昭和12）年 油彩、キャンバス 当館蔵

とわたしは考えている。例えば、栄太郎はもともと、制作時期にかかわらず生き生きとした女性の姿をよく描いた。しかし彼の1930年代後半以降の作品には、新しい女性像も見られる。以前にはなかった、きわめて力強くたくましい女性たちが登場するようになるのである。和歌山県立近代美術館が所蔵し、今回の「アメリカへ渡った二人」展でも展示された《抵抗》（1937年）（図3）はその代表例である。

前述のとおり綾子は、1930年代中盤や後半の時期、非常に熱心に平和運動を行っていた。米国と日本で高まっていた戦争の気運に抗おうと精力的に活動していた綾子の姿や思想が、栄太郎の作品の内容に反映されていたと考えるのは不自然なことではないだろう。もちろん、二人は夫婦として、互いに気持ちが離れたり、ぶつかり合ったりすることもあった。しかし、太平洋をまたいで、持ちつ持たれつ、社会変革を目ざして運動したこのカップルの足跡は、なんとも興味深く、また独特な歴史といえる。

近年、米国や日本での社会運動史や日系移民・移住史の研究において、二人の存在や活動が言及されるケースは少しずつ増えてきた。しかし、二人の歩みを検討した本格的な歴史研究はまだ少ない。思想史・社会運動史の個性的な主体である石垣綾子と石垣栄太郎の経験をさらに解明するべく、研究を進めてゆくつもりである。（まつさか ひろあき：ミシガン大学歴史学科博士課程）



参考 石垣栄太郎《アマゾンズ (Amazons)》1937（昭和12）年 写真（C. B. ROSS 撮影）太地町立石垣記念館蔵
※《抵抗》（1937）は、写真でのみ確認できる《アマゾンズ (Amazons)》（1937）を後年に改作、あるいは再制作した作品の可能性もある。（註：奥村一郎）

ワークショップ「見て、描いて、国吉康雄」カゼインというメディウムの魅力

【日 時】2017(平成29)年12月10日(日) 13:00-16:30

【参加者】10名(高校生以上対象)

【場 所】2階ホールと展示室

【ナビゲーション】岡山大学大学院教育学研究科教科教育学専攻美術教育コース1年一同

【共 催】国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科(国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座)、和歌山県立近代美術館

「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展の関連事業として、国吉が制作に使用したカゼインを用いたワークショップを開催しました。国吉の故郷にある岡山大学大学院教育学研究科には、公益財団法人福武教育振興財団、公益財団法人福武財団からの寄付により、2015(平成27)年に(国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座)が開設され、それ以来、国吉をめぐるさまざまな研究や顕彰が行われています。今回のワークショップもその活動の一環で、当館と共催することになりました。ナビゲーターを務めたのは、「岡山大学大学院教育学研究科教科教育学専攻美術教育コース」の1年生4名(結城黎、片山麻里江、尾上真由、太田幸奈)です。

カゼインとは、牛乳に含まれるタンパク質からなるメディウムで、顔料と混ぜ合わせると、パステル調の柔らかい不透明な色彩の絵具になります。描き直したい部分は水で消すこともできる、油彩と水彩の中間のような画材です。戦前から戦後のアメリカでよく用いられました。国吉がカゼインを好んで使ったのも、1940年代くらいから1953(昭和28)年に逝去するまでの晩年の時期です。特に戦後に描かれた道化師やサーカスをテーマにした作品の、マットな質感や、少しくすんだような明るい色彩はカゼイン独特のもので、それまで手がけていた油絵とはまた異なる魅力を持っています。戦後の日本でも、教育現場で注目を集めた時期があったようですが、アクリル絵具の普及に伴い、次第に使用されなくなっていきました。

国吉は、カゼインの特徴を活かした4つの技法「重ねる、線で描く、拭く、かすれさせる」を用いて、実に豊かな画面を作り出しています。ワークショップでは、こうした技法を実践しながら、参加者自身の作品を制作することを試みました。カゼインは乾くのがとても速く、固まって堅くなる一方で脆くもなるので、凹凸のあるキャンバスなどは支持体には不向きです。平面性の確保された板などしっかりしたものが適しており、今回はハードボードとよばれる集成材を使いま

した。

ワークショップの会場となったホールで、カゼインの性質などを説明した後、国吉の4つの技法「重ねる、線で描く、拭く、かすれさせる」を試しながら、一層目をまず完成させました。そして展示室へ移動します。ここでは、「舞踏会へ」(カゼイン、石膏パネル/1950年)、『ミスター・エース』(油彩、キャンバス/1952年)、『クラウン』(グアッシュ、紙/1948年)、『曲芸師』(カゼイン・クレヨン・インク、紙/1951年)など、油彩、グアッシュ、クレヨンといったカゼイン以外の画材でも描かれた、戦後の国吉作品を鑑賞しながら、画材の性質や描き方の違いを比較しました。そしてホールに戻って、各自の制作を再開します。絵はより国吉に近づくために、国吉の作品のなかのいくつかのパーツを用いて描くことにしました。「国吉クラウン帳」というパーツ集(国吉の作品に描かれた道化などの人物、仮面、テントなどの輪郭線だけをまとめたもの)を事前に準備し、各自がパーツを選んでその組み合わせによって画面を構成していきます。まずパーツをトレーシングペーパーにトレースして下絵を作り、さらにカーボン紙を使って、1層目の上に下絵を転写します。そして転写された下絵をガイドにしながら、カゼイン絵具を塗り重ね、作品を完成させていきました。

ほとんどの参加者がカゼインを使うのは初めてでしたが、終了後のアンケートを見ると、カゼイン独特の粘度や速乾性に戸惑いながらも、「重ねる、線で描く、拭く、かすれさせる」というカゼインだからこそ可能な技法の面白さを体験できたようです。そして、このメディウム特有の光沢のないマットな質感や、絵具を塗り重ね、拭き取ることで生まれるかすれの効果から生まれる色彩の深さなど、国吉がカゼインを使うことで求めた作品の表現に、鑑賞から一歩踏み込むことで、その再現の難しさも含めて理解し、体感する貴重な機会となったのではないのでしょうか。今回、岡山大学のみなさんと一緒にこのワークショップを実現できたことを大変嬉しく思います。(奥村一郎)



保存のはなしをしよう。

④小さな宇宙を作る

作品をもっと近くで守っているものに額縁があります。建物、部屋、額の内側とだんだん空間が小さくなるごとに、より厳密な保存環境を作るようにしています。空間が小さいからこそ、基準を高くできるのです。

当館の展示をご覧になった方は、版画や素描などが、作品のサイズに合った枠を切り抜いた厚紙にセットされ、額縁に入れられているのをご存じだと思います。額縁の中の白い厚紙は、マットと呼ばれています。美しいバランスで窓を切り抜くことで、たとえ小さな作品でも、集中して見るができるようになります。

作品に密着するものですから、素材には充分注意する必要があります。マットには中性紙という、酸性にもアルカリ性にも傾いていない特殊な紙を選び、マットに作品を固定するための用紙や接着剤も、修復家の指導を受けて決めています。展示のためだけではなく、保存にも適しており、数多くの版画や素描などを、このマットに入れた状態で保存しています。

より作品を引き立てるために作られた専用の額縁がある作品の多くも、ガラスの内側はすっかり入れ替えられています。もともとのマットが酸性の紙である場合、また作品の裏にベニヤでできた裏板が薄い紙をへ



マットに入れて展示された紙作品

だてで当たっている場合は、作品の用紙も影響を受けて酸化し、脆くなることが予想されるからです。

額縁の素材もできるかぎり作品に負担を与えないもので作っています。裏板も、ベニヤは軽くて加工しやすく、強度があって使いやすいのですが、酸性が強いため、かわりに合成樹脂のパネルを使います。どうしてもベニヤ板を使わなければならない場合は、アルカリ性の紙を挟んで保護します。額のガラスをクリーニングするときも、見た目がきれいだけでなく、クリーナーの成分があとに残らないようにエタノールなどを使って拭き上げます。額縁のなかに、作品にとってストレスの少ない、小さな宇宙を作っているのです。

ところで、額縁にガラスや透明アクリルが入っていると、反射しないように照明を工夫しても、ガラスなどのわずかな色味があるためによく見えないという意見もときどきうかがいます。たしかに、直接に作品を見ると、色彩だけでなく、質感やわずかな凹凸まであざやかに感じられます。

しかし、ガラスなどが保護してくれるからこそ、近づいて見るができますし、作品の前で、発見したこと、感じたことを誰かと



展示していないときには、額を外してマットごと水平にして保存



マット内の作品の様子

話し合うこともできます。うっかり触れてしまうことがあったとしても、脆弱な作品の表面は守られます。保護がなければ、湿度のある息がかかることも避けなければなりません。紙にぼつぼつとしたシミがあるのをご覧になったことがおありだと思いますが、あのシミの原因のひとつがカビです。唾がとんでも、手の汚れがついても、カビの栄養になります。

じつは、目にほとんど感じられないくらい反射が少なく、透明度の高いアクリル板もあります。これは大変高価で、残念ながら当館ではすべての作品には行き渡っていません。コレクション展でいつもご覧いただける作品なら、佐伯祐三の油彩画の額には、この特殊なアクリル板が入っています。たぶん、ほかの額縁のガラスやアクリルと比較してみると、違いがおわかりになるでしょう。

(植野比佐見)

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分(入場は16時30分まで) 休館／毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

4.14(土)～6.24(日)

産業と美術のあいだで 印刷術が拓いた楽園

当館が所蔵する版画の名品を中心に、身の回りの様々な印刷術がひとの創造力を刺激して美術作品が生まれてきた側面をご紹介します。アートがもっと身近になる機会です。

前田藤四郎《時計》
1932(昭和7)年



7.7(土)～9.2(日)

なつやすみの美術館8 タイムトラベル

9.8(土)～10.20(土)

和歌山—日本

和歌山から近代・美術、
そして近代美術館を見つめる

11.3(土)～12.16(日)

特別展 創立100周年記念 国画創作協会の全貌展

4.28(土)～7.8(日)

コレクション展 2018-春夏

特集 庭園の眺め 高橋力雄の木版画
特集 滋賀県立近代美術館所蔵 院展の画家たち II

8.4(土)～10.21(日)

コレクション展 2018-夏秋

特集 鈴木昭男 音の場の探求
特集 滋賀県立近代美術館所蔵 院展の画家たち III

10.30(火)～12.24(月・祝)

コレクション展 2018-秋冬 和歌山ゆかりの作家たち

2019.1.4(金)～1.20(日)

コレクション名品選

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展示会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。



友の会 会員特典いろいろ

1. 展示会の無料観覧
2. 各種行事への参加 (美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展示会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000 円
学生会員 3,000 円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当：中川

